

# 強者の戦略

## 「和訳せよ」の意味すること

それでは、最新の東京大学の入試問題を題材にして、「英文を前から読む」ということについて説明してゆきます。ただ、この英文は入試「問題」なので、ただ書き手の言いたいことを読み取るだけでなく、出題者の指示にも従わねばなりません。この問題の場合は、下線部の和訳をせよ、という指示があります。ここで意識されなければならないのは、「英語を読む」という作業と、「和訳する」＝「英語を日本語に翻訳する」という2つの作業がそれぞれ別個に行われなければならないということです。少しわかりにくい言い方ですから、「読む」と「和訳」することの区別については後述するとして、ここではまずは和訳を気にせず、「英語を（前から）読む」ということに集中する、と思って以下を読み進めてください。

### 前から読む＝予測しながら読む

英語を前から読むために必要な力は「予測する力」です。さらにその予測は2つに分けられます。それは、英文の構造に関する予測と内容の予測です。前者は単語力、文法力、構文把握力を基に次に来るべき英文の構造を予測し、後者は、論説文であれば文脈を適切に把握しながら、今読んでいるセンテンス、次に来るべきセンテンスの内容（落としどころ）を予測する力です。

### 構造面での予測

そこでまず、下線部（ア）について、前から読み進めるときの頭の中をスローモーションで表現してゆき、どのような予測が起こっているか、まずは構造面について説明します。最初に“Loneliness is”ときたところで主語、動詞です。動詞は be 動詞ですからここで終わらずに、次は

補語が来ると構えます。補語は、形容詞か名詞。ということは、次を読むと、“emotionally”とあり、これは副詞だから、very beautiful（副詞→形容詞）のように“emotionally”のあとに形容詞が来るのかな…と思いながら、and を見て、「まだ続くのか。なるほど、“emotionally and physically” ね…で、次こそ形容詞？」と思って次をみると、“painful”で、「やっぱり！」となります。これで SVC が完成しました。ということは、ここでピリオドが打てる状態ということです。SVC（形容詞）とピリオドが打てる状態で、まだ話が続くという場合は、次には副詞か前置詞や接続詞、関係詞などのつなぎことば、機能語が来ることとなります。この場合は、“born”という過去分詞が来ています。ということは、この過去分詞を副詞に見立てる…分詞の副詞的用法（ややこしいですね。簡単に言うと、分詞構文）となります。“born from a lack…”とくるのですが、lack のところで考えるべきことがあります。lack という単語は抽象名詞です。辞書では「不足」、「欠乏」などという訳語が与えられていますが、抽象名詞を見たら動詞が背後に浮かぶような習慣も必要です。

### 抽象名詞を見たときに考えること

discovery of this plant という表現を見たとき、皆さんは何を考えるでしょうか。discovery の裏側に discover という動詞、もっと正確には discover は目的語を必要とする他動詞なので、discover(v) A(o)で「A を発見する」という動詞を読み取って、何を発見するの？Aは何なのか？という疑問が思い浮かぶ必要があります。そうすると、discovery of this plant などとくると、なるほど、この植物「を」発見したのね、となります。これを頭の中でのイメージで表現すると、discovery という単語を見ると、頭の中に、何かを発見している姿が思い浮かび、その何かは黒い

# 強者の戦略

ベールに包まれていて、「それ、何？」という疑問が浮かび、of this plant で、「あーっ」となります。これを文法的な側面から説明すると、この of は目的格関係の of と呼ばれ、日本語では「を」と訳すものです、となります。さらに付け加えると、このようなイメージ化をする場合、黒いベールに包まれた目的語以外に、もう一つ指摘する人もいるかもしれません。「この植物を発見したのは誰？」と。この表現が出てくるまでの文脈でそれが誰なのかがわかっている場合はこういう疑問は浮かびませんが、そうでなければ当然出てくる疑問です。その場合、discovery という抽象名詞から思い起こされるのは、黒い影「が」出てきて、黒い何か「を」発見している、というイメージです。そうすると、his father's discovery of this plant と言うと、his father's が、発見者を示していることがわかります。これに文法的な解説を付け加えれば、his father's は discovery の意味上の主語、となります。所有格で動作主を表す（意味の上での主語になる）、という発想は動名詞のところでも体験済みです。He is proud of his father's trusting him.などのパターンです。ちなみに、his father's discovery of this plant は内容上、his father's discovering this plant (discovering は動名詞) や that his father discovered this plant (that は接続詞の that、that S+V で「SV すること」ということ) の意) と変わりません。ただ、動詞を使わず抽象名詞を使うと、英語ではフォーマルになるので、論説文には多く見られる表現になります。論文などからの引用が多い入試英語で、生活英語の中では見られないような抽象名詞が多く出てくるのはこのためです。こう説明すると、discovery という英単語を見て、「発見」という訳語が思い浮かぶだけでは十分にアイデアを受け取ったことにはならないことがわかってもらえるでしょうか。

さて、下線部 (ア) に話を戻しましょう。この場合、“a lack of warmth”なので、lack A という他動詞が頭に浮かび、「何を欠いているの？」となり、「ああ、『温かさ』ね」、つまり、“a lack of warmth”は、「温かさを欠いている状態」になるわけです。ただし、欠いているのは、子供時代、と限定がついて、“a lack of warmth / in early childhood”「温かさを欠いているのは子供時代のことですよ」と情報が付け加えられているわけです。で、ここでピリオドが打てるのですが、まだ話を続けたくて、つぎに関係副詞 when が来ています。時を表す名詞 (childhood) があって、その直後に when とくればまずは関係副詞の when を考えます。で、when we need it とあります。when 以下は childhood の説明になっているはずですから、日本語で表現すれば「私たちがそれを必要としている子供時代」です。

## 指示語について

最後の“it”ですが、代名詞に対する考察は設問にあらうがなかろうがしなければなりません。内容理解には不可欠だからです。さらに、今回の東大の問題文は、下線部 (ア) が it、下線部 (イ) が this の内容を明らかにすることを求めていますので、それをしっかりと明示する必要があります。ところで、代名詞の it と this は何が違うのでしょうか。おおざっぱに言えば原則は、it は前出の単数名詞を指し、this は前出の句、節、文を指すこととなります。もちろん、形式主語構文のように it が that 「節」を指したり、this が単数名詞を指すこともあります。あくまでファーストチョイスは前述の通りで、それで考えておかしななかったらそれで OK、としなければなりません。後述しますが、この「ファーストチョイス」という考え方は大切です。それに従えば、この下線部 (ア) の it の指すものは warmth となります。

# 強者の戦略

さあ、これでピリオドに到達です。では和訳に、と進めたくりますが、今回は、特に構造面に注意して前から読むことに集中するために、続けて下線部（イ）の構造面からの考察に移ります。

## 仮定法、イディオムについて

こちらもスローモーションで、解説してゆきます。まず出だしの“I wouldn't have known this”で反応すべきなのは、ここまでの英文が過去形で書かれていたのに、“wouldn't have known...”と助動詞+have+PP、つまり仮定法過去完了で書かれているところです。そうすると、「条件は？」「if 節は？」となり、次の“but for”を見たときに、ああ、but for A で、「A がなければ」のパターンね、と思い至ることになります。このパターンは、文法書などでは「if を用いない仮定法」の一つの類型として提示されたり、潜在仮定法などと呼ばれたりしている表現です。But for water no living thing could exist. 「水がなければ『ば』いかなる生物も存在できないだろう」、つまり、but for water という前置詞句に if の意味が含まれている（潜在している）パターン）になっている、と判断でき、これが、この文章を前から読んだ場合のファーストチョイスの解釈になります。もちろん、違う文脈で but for A ときて、その文章が仮定法でなければ、「しかし A の間に」とか「しかし A にとって」などいろいろ解釈できますが、ここは仮定法なので、「A がなければ」がパッと頭に思い浮かぶわけです。もちろん、丁寧に説明すれば、but は「～以外」「～を除いて」の意の前置詞、for は原因・理由の for、さらにここに if の意味が加わって、「A という原因がなければ」となります。あるいは、この for を「～を求めて」の意の要求の for と考えて「A を求める(for)場合(if)を除いて(but)」つまり「A を求めなければ」→「A がなけ

れば」となるという解釈もできます。こういう部分は複数の説が考えられ、ややこしいところもありますが、いずれにしても結論としては「A がなければ」となるわけですから、どの説が正しいかを議論することに実用的なメリットはありません。こういう場合、それをさっと解釈するために、but for A で「A がなければ」の意ですよ、一つの単語のように覚えておくと便利です、イディオムですよ、として暗記を促されることになります。

本文に戻りましょう。いま、but for の話をしてしまいましたが、これよりも前に know this の this の内容について考察が要るのは言うまでもありません。これは、指示代名詞で、前の“we passed through a magnificent snowy landscape”を指しています。この this の内容について明示するように設問が求めています、設問で求められようと求められまいと当然考慮しなければならないところです。そして、but for 以下にいきます。for は前置詞なので後には名詞が来る。従って、the fact という名詞が来るのは自然な流れです。ここで、fact の前に定冠詞の the が付いていることに着目です。the は、後ろに来る名詞が、どういう名詞なのか、限定する働きがあります。しかし、これよりも前に fact に相当する話は出ていません。前に指すもの（限定）がないとなると、後ろにあるはずと考え、そこで、“the fact that”とくれば、この that は接続詞の that で、that 以下のまとめ（節）が前出の the fact と同格関係になる、同格の that と解釈するのがファーストチョイスとなります。そう考えて、「この that の後には S+V が続くはず」と予想します。で、読んでいくと実際にそうなっています。

## ファーストチョイスの重要性

ところで、英語力が伸び悩んでいる人の一つの典型が、ある解釈が提示されたときに、「それは

# 強者の戦略

そうとも読めますが、こうとも読めませんか？」つまり、この場合であれば、この **that** が関係代名詞や副詞の **that** の可能性はありませんか？などとさまざまな可能性を考えてしまう人です。こういう発想は速読にとっても大きな障害となります。たとえば、中学生のときに学んだ不定詞の副詞的用法は、「～するために」や「～して」、「～するなんて」など7つの意味が考えられるのですが、ある不定詞の副詞的用法を見たときに7つの意味をすべて当てはめてから1つに絞り込もうとする発想は、現実的にはしません。つまり、ネイティブスピーカーは一つ一つの不定詞の副詞的用法の可能性を1/7の確率で考えることはしません。実際には、その不定詞の前後の形から、たとえば、前に感情表現があれば普通は、原因・理由 (I'm glad to see you.) と考えますし、**enough** が入っていれば、程度 (He is tall enough to touch the ceiling.) など、ほぼ1/1で意味を確定させられます。さらに脱線が続けると、「目的と結果は表裏一体」と言えば、領いてもらえるでしょうか。He went to America to study English. は、「彼は英語を勉強するためにアメリカに行った」という解釈ができますが、「彼はアメリカに行った結果英語を勉強した」とも言えます。全く同じ英文で2つの可能性があるのですから、ややこしいですね。ただ、どちらで読んでもOKな場合も多いし、これは後述しますが、前後の文脈からどちらなのかは明白な場合が圧倒的ですし、誤解を恐れるのであれば、He went to America in order to study English. とすれば見た目にも意味は1つになります。さらに、結果用法では、無意識の動作 +to V の場合が多い (I woke up to find myself alone in the room.) など、現実の運用では、だいたいこういう場合はこれが多い、というファーストチョイスが決まっています。我々教師が生徒の皆さんに「これではダメですか？」という質問で食い下がられた場合、言語学は自然科学ではあり

ませんから、「そういう可能性がないわけではないけれども…」という前提は残る場合もあるのですが、回答としては、「普通は誰もそういうふうには考えない。こういう場合のファーストチョイスはこれで、それでおかしくなかったら、それで止めればよいのですよ」ということになります。「いや、誰もそういうふうには考えない」「普通はそう考えない」という言葉を受け入れてほしいときもあります。

## 多読の意味、経験値を高めること

言葉を学ぶということは、単語の使い方や文法のルールを学ぶだけでなく、論理的に複数の可能性があるものを1つに絞るための、こういう場合はこう読む(予想する)のが普通、という経験則的な側面も学ぶ(体験する)必要があり、それを体に覚え込ませるためにもある程度の多読が必要で、これが多読が推奨される理由です。マイナーな解釈も含めてあり得るすべての可能性を考えていると、文章を読むことが苦痛になってしまいますし、時間ばかりかかってしまいます。書き手はいかにアイディアをわかりやすく伝えるかに腐心していますから、読みやすさのためにも、「こういう場合には…」という、読み手と書き手が息を合わせるための共通認識に訴えて書いています。そういう意味で、書き手には、言いたいことをわかりやすく読めるように表現する(ルールに従って書く)義務があり、読解のルールは英作文の際にも大変大事なことになります。

我々が日本語を読む場合も、「普通は次に来るのは…」と予測して読んでいるはずですが、日本語の作文の添削指導では、予測に反する書き方があると、すっと頭に入ってきやすい(予測に合うような)書き方に改めます。もちろん、あえて、ファーストチョイスで読めないようにする場合(それらは挿入、省略、倒置などで、イレギュラー構

# 強者の戦略

文と呼ばれます)もありますが、これには、形式的理由(文のバランスのため)、心理的理由(主に強調)などの意図があり、確信犯で書いている場合がほとんどです。

英語教師はみなさんよりたくさん英語を使っている英語使いの先輩なわけです。授業という場で、その先輩の言葉に従うということは先輩の経験を即時に苦勞せずに入力することができる貴重な機会なわけです。

さて、脱線が長くなりましたので、話を元に戻します。the fact 以下に話を進めます。さきほど、that のあとは S+V が来ると予測して…と言いました。本文で、I が主語、happened ときたところで happen の動詞の使い方を思い浮かべ、直後の to を見て、ああ、happen to V 「偶然 V する」というイディオムね、となります。ところでその V は? look です。look は自動詞なのでここでピリオドを打てますが、この場合はさらに outside という副詞が続きます。もちろん、look の時点で内容も考えるわけで、どこを見るの? という内容面での予測もするので、その点でも outside を見ていたんの落ち着きを見ます。で、いったんピリオドが打てる状態になるのですが、この場合はさらに話を続かせるために前置詞句が続きます。on my way 「途中で」というイディオムです。そしてさらに話が続き、to V と、つなぎ言葉である不定詞の形容詞的用法が続きます。内容面からも「途中で」って、何の途中で? と思うから、次の to 不定詞が way にかかる不定詞の形容詞的用法だと前から読める側面もあります。これで、ピリオドまでできました。

## 動詞の使い方、構造面での考察

それでは最後の下線部(ウ)に進みましょう。

“We deny”の時点で、動詞 deny の使い方を考えます。

deny は deny(v) A(o) で「A を否定する」、deny Ving 「V したことを否定する(to V は不可、など英文法で習いましたネ)」、deny that S+V 「SV したことを否定する」などの第3文型(SVO)以外に、第4文型(SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub>)もとれることを知っていましたか?

deny O<sub>1</sub> O<sub>2</sub>で、「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を与えない、使わせない」という意味があります。これは比較的よく使われる形ですし、前から読むためには、結局は単語力(単語の使い方まで含めた単語力)が不可欠なのですが、ここでは前から読みから少し脱線して、構文を把握する力や文法の力を活用して、意味を類推することが可能であることにも触れたいと思います。

## 単語の意味の類推について

英文の大まかな意味を決めているのは単語そのものというよりも文の構造である場合が多いものです。たとえば、第4文型をとる動詞であれば、「与える」「とる」「与えない」の3つの意味に集約できます。以下の4つの英文の内容上の共通点を考えてください。

1. He gave her a nice present.
2. He taught her English.
3. He sent her the picture.
4. He showed her the picture.

注目したいポイントは、1.であれば、「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を与える」、2.は「知識を与える」3.は「送って与える」4.は「見せて与える」、つまり、「与える」という核となる意味を共有しています。

これらは「与える(O<sub>1</sub>の中にO<sub>2</sub>が入ってくる)」型と言えます。大雑把な意味が「与える」。そして

# 強者の戦略

動詞本体が、細かな様態を描写している。第4文型をとる動詞のほとんどがこの意味になります。

こう考えると、*Music affords us pleasure.* という英文についても、動詞 *afford* の「与える」という意味を知らなくても、この英文が第4文型であることに着目すれば、私たちの中に *pleasure* が入ってくる、それをした主体が *music* なんだ、と意味が把握できます。ここで、「*afford* は『余裕がある』』という意味の動詞だから…」という不完全な単語の知識に固執してしまうことが一番危険です。

さて、第4文型の意味は、この *give* 型と呼ぶべきものの以外に、*take* 型と *not give* 型があります。

*It took me five hours to finish the job.*

大雑把な意味は、“*O*<sub>1</sub> の持っているものの中から *O*<sub>2</sub> を取る。” 私から5時間をとる → 内容訳をすれば、「私には5時間かかった」となります。

*The work cost him his life.*

彼から命を取る → 内容を日本語で表現すれば、「その仕事の原因（無生物主語）で、彼は命を失った」となります。

*not give* 型は *O*<sub>1</sub> に *O*<sub>2</sub> を与えそうになったが、それを与えないようにした、という意味合いで、*His visit saved me the trouble of writing to him.* 彼に手紙を書くという作業が私に入ってこようとしていたけど、それを阻止してくれた。そしてその主語が、彼の訪問、という関係です。内容を日本語で表現すれば、「彼が訪問してくれたおかげで（無生物主語は原因・理由で訳出）、私は彼に手紙を書く手間が省けた」と表現することになります。*I'll spare you the trouble.* などと同じように考えられます。

さて、この下線部（ウ）の *deny ourselves the benefits* はどう考えられるでしょうか。「与える」？「取る」？「与えない」？ この3つの中から選べ、と言われたら前後の文脈からしても「与えない」という意味がしっくりくるのではないのでしょうか。このようにして、単語の意味がわからなくても何とか意味を類推することはできます。

こういう、単語の意味の類推というのは、1. 構造の活用（今お話ししたやり方です）、2. 語源の活用、3. 文脈の活用、などあり、大変有効なものですが、こういう技術を多用しては英文を読むスピードが極端に落ちますので、こういう技術的な読み方は、極めて難しい単語の意味の類推に限定されるべきです（高校の検定教科書に出ている単語の意味は、こういう類推力を用いるのではなく、単に知識として読める状態にしておかなければ速読などできません）。だいいち、このやり方で読むのであれば前から読みではなく、振り返りをしなければならぬ場合も少なくありません。やはり前から読みの基本は正しい単語力を持つことが大前提となります。

つまり、*deny O*<sub>1</sub> *O*<sub>2</sub> という使い方を知識として知っていなければなりません。*deny* = 「否定する」とだけ覚えているのは真の単語力とは言えません。ピリオドまでに必要な要素を意識する、動詞であれば文型に連動した意味を習得しなければなりません。

## 単語の覚え方

みなさんは、「動詞“*get*”の意味は？」と質問されたらどう答えますか？

1. *He got to Tokyo.* 「着く」
2. *He got angry.* 「～になる」

# 強者の戦略

3. He got the book. 「～を得る」
4. He got her a nice dinner.  
「～に…を得させる」
5. He got his hands warm.  
「～を…にする」

それぞれ“get”の意味が違いますね。ただ、上の英文の1.~5.の数字は、日本で学習する第1文型から第5文型の数字に対応しており、それに気づけば使われている文型によって get の意味が変わってくることに気づくはずです。一つ一つの英文に、5つの意味をそれぞれ当てはめて解釈してみるなどということせず、我々が意味の違いを瞬時に見分けられるようになるためにも、文構造への着目が不可欠です。それが単語力として習得されていなければなりません。皆さんは「単語は文章で覚えましょう」と何度も言われたのではないのでしょうか。それは使える単語力にするためには、その単語がピリオドまでの中でどの位置にあるのかという考察が欠かせないからです。こういう「使える単語力」を身につけて、英文を前から読んでいけるようにしましょう。また、その力なくしては正確なリスニング力も育まれません。

さて、本文に戻りましょう。“We deny ourselves the benefit”の the も無視できません。日本語に訳すとか訳さないとかではなく、the の機能に着目して読むのが英語の読み方です。the は限定の the ですが、前に benefit に関連する表現は出ていないので、やはりこれも後で限定が来ると予告する the です（少し和訳に話を脱線させようと、こういう the の機能は日本語にはありませんので、もちろんこの the は「その」などと訳出してはいけません）。で、“the benefits of solitude”の of を見たときに、of 以下が前の benefit を修飾する（限定する）と考えます。この of は「所有の of」で、the name of the singer = the singer's name

（「所有格」の働き）「～を持っている」と同じで、「一人であるということが持っている利点」となります。あるいは、この of について、of のもっと根源的な意味、A of B は、A が部分で B が全体、つまり、B は出所を指す（ここから原因理由の of も出てきます）ことから、「一人であることから生まれてくる恩恵」と解釈することも可能です。

英文のほうに戻ります。“the benefit of solitude”で、英文の構造からはここでピリオドが打てる状態になります。従って、後に話を続けたければつなぎ言葉が必要となり、この場合、because という接続詞が来ます。そして、because のあとは S+V が続きますので、we(s) see(v)…となり、予想通りの収まりを感じます。

続いて、“see”のところで動詞 see の使い方を考えます（考えるというよりは潜在意識の中にある see についての単語知識との照合作業を行うと言った方が正しいでしょう）。see は通常目的語をとる他動詞なので、“see the time”で(V)-(O)と想定し、“the time”の the にも反応。これも前で time の話をしていませんから、後ろから限定があると予測します。すると、“the time”のあとの“it requires”が後ろから限定している（後置修飾）とわかります。これを関係代名詞の目的格の省略とか接触節と文法的に説明できますが、これらはこうやって前から読むことで簡単に把握することができます。そして次なる問題は、“as a resource”という前置詞句（副詞句）です。前置詞とは何でしょうか？いろいろ定義できますが、名詞の前にあって、それらがまとまりとなってどこかを修飾する、というのが一番多いパターンです。では、この場合、as 以下はどこにつながるのでしょうか。①requires にかかる、②see にかかる、の2つが考えられます。内容から考えることになると思う人が多いと思うのですが、構造面から大切なことは、①であれば、先ほどの関係代名詞節（接触節）はまだ続く、【the time (it requires as

# 強者の戦略

a resource...)] ということになりますし、②であれば、先ほどの関係代名詞節は *requires* で切れる【the time (it requires)//】 ことになります。このことは和訳のところでも重要になります。①で解釈した場合と②の場合とでは、訳の順序（日本語を書く順序）が違って来るからです。このようにして訳の順序を見ることによって採点官は受験者が構造を正しく把握できているかどうかをチェックできます。つまり英語は前から読まなければなりません、前から訳してよいわけではありませんし、後ろから訳し上げればよいというわけでもなく、まず英語そのものを理解して、それを日本語の順序に置き換えてやる必要があります。ですから、「読む」という作業と「訳す」という作業は別々にしなければなりません。また、純粋な翻訳であれば、構造に拘らずに自由に日本語で表現してもよいのですが、「和訳せよ」というのは、構文は直訳が原則で、ということですから、英語の構造理解ができてることがわかる日本語にしておく必要もあります。これは実は防衛策でもあります。というのも、構文がぐちゃぐちゃになっていると、採点システム上、部分点も与えられないからです。

さて、ここでは①なのか②なのか、ですが、文法的にはどちらも考えられます。従って、先述の通り、内容を考えて…ということになるのですが、実はこの場合もファーストチョイスとか、単語力が効いてきます。*see* という動詞の単語力です。*see A as B* で「A が B だと見なす」という使われ方を以前に体験していた人にはわかります。ということで正解は②です。これを知っていれば一発、一秒です。振り返りもせずに読めます。それが難しければ、直前から修飾先を順番に探す形で、*as* 以下を *requires* にかけて、「う～ん、いまいち意味がおかしいなあ」、そこで、*see* のほうにかけて、つまり構造的に *see A as B* でとって、そうそう、英文の意味を決めるのは構造だから、ということで、

I regard him as the best doctor.

We think of him as the best doctor.

We speak of him as the best doctor.

などすべて「A=B」「A が B だ」という SV 関係がある構文と同じように考えて、「A が B だと見なす (see)」となり、それで意味を取ると、「うん！こっちのほうがよい！」となって…で、正解は正解。ですが、前から読めていませんし、何よりも時間がかかりすぎます。速読の鍵は単語力にあることを心得ておいてください。

ところで、先述の *regard A as B* ですが、「A が B だと考える」→「A を B と見なす」と意識してイディオムにしてしまっていますよね。このように、イディオムにしておくこと英文全体の構造把握にも有効であることがわかってもらえるでしょうか。

## リーディングとスピーキングの関係

話は少し変わりますが、ある一定の単語力や前から読む力を備えた人には、軽い話題であれば、リーディングよりもリスニングのほうが楽なものです。英語力の伸長の中で、リーディングよりもリスニングのほうが得意になるという段階を迎えるのが通常です。

この英文の場合でも、“we see the time it requires as a source”のところで、“the time”と“it requires”は直前直後で修飾被修飾の関係にあるわけですから、the time と it requires の間にはほとんど息継ぎが入りません。それに対して、“as a source”は少し離れた *see* にかかるわけですから、比較的はっきりとしたブレスが入ります。この英文にスラッシュを入れて、we see the time / it requires // as a source などと表現することもできます。音読で一番大切なのは息継ぎの位置で

# 強者の戦略

す。息継ぎの位置が正しくなかったり、すべての単語を等間隔で発音されると、何を言っているのか全くわからなくなる、と言え言過ぎですが、聞き手に負担を与える話し方になります。逆に正しい息継ぎで発音されると、英文がスッと頭の中に入ってきます。正しい息継ぎの位置は英語の文構造によって決まります。文字では文構造に関係なく単語が等間隔で並びますが、音読の際には緩急がつかますので、黙読するよりも英文が頭に入ってくるようになります。逆に言うと、正しく音読ができるということは、その英文の構造を正しく把握していることの証でもあります。英検の面接試験でも、一つ一つの音素もですが、それ以上に息継ぎの位置が重視される所以です。実際ノンネイティブの発音する英語を聞いていても、息継ぎのおかしな場合は、大変な聞き取りにくさを感じます。

さらに、これは黙読とも大いに関係しています。というのも、我々は黙読するときも、一つ一つのアルファベットや単語の上を等間隔で一定速で目を動かしているわけではないからです。音読のときとほぼ同じ要領で、息継ぎの位置までまとめて黙読して、適宜目をとめて、というように、黙読時もリズムを持って読んでいます。正しく英文の構造が把握できる→正しく音読できるわけですが、英文の構造の意識を潜在意識に定着させるためにも、逆方向での訓練も非常に大切になります。つまり、正しい音読をすることによって、文構造への意識を高める、ということです。小学校の国語で、音読をすることの意義の一つもここにあり、英語でも同様の実践が必要です。英語教師が音読の重要性を強調する理由がここにあります。特に心に刻んでおいてほしいことは、音読は正しい息継ぎを意識してしなければ意味をなさない作業になってしまうということです。ですから、授業中の先生の発音や放送される音声を聞いて、英文にスラッシュを入れたり、模範演技とな

る CD が付属している教材を利用するなど、お手本のある教材を利用することも大切です。

ところで、文字上でも息継ぎの幅に差異が表現されている場合もあります。たとえば、カンマがそうです。今のところも、“we see the time it requires, as a source” と表記すれば幾分わかりやすくなるでしょう。ところが、このカンマは必須ではありませんし、我々が日本語で使う読点と同様に書き手の主観で処理されることも多くあります。もちろん、英作文の場合は、読み手への負担を下げるのがポイントになりますので、カンマをつけましょう、などと添削指導されることはあると思いますが、必須ではありません。

では、本文に戻ります。ここで皆さんに質問があります。「“as a source” の次のつなぎ言葉、to V の to の前の息継ぎは小さくてよいでしょうか、大きい方がよいでしょうか？」

言いたいことがわかって頂けているでしょうか。つまり、to V がどこにつながる（どこを修飾する）のでしょうか、と同じ問いかけです。直前であれば息継ぎは小さく、遠いところであれば大きく、となります。

ここまでリーディング問題を素材に話をしていますが、リスニング、ライティング、スピーキングの話も随所に出てきました。英語の4技能をバランス良く鍛えることで英語の力がついてくることがわかってもらえたと思います。

そしてその技能を正しく使うために、最終的には潜在意識下に、文法の知識が必要です。この英文の場合でも、文法的、解析的な授業でいけば、後続の“to use”の use という動詞は目的語の必要な他動詞 (use A で、「A を用いる」) なのに、目的語がありません。目的語がない不定詞の代表と例えば、不定詞の形容詞的用法 (the book to read <read(v) the book(o)> と修飾語と被修飾語で (V)-(O) の関係があるのは原則、不定詞の形容詞的

# 強者の戦略

用法のみ)) であり、ここでは use(v) a resource(o) の関係が成り立つので、to use 以下は a resource にかかる不定詞の形容詞的用法である、という解説ができます。これはこれで英文法の考察や英語という言語の理解という意味では大変大切な考察なのですが、もう少し、前から読む視点も盛り込んでおきましょう。

前から読むと、ここは内容面からも同時に考える必要があります。“see... time ... as a resource” 「時間がある資源であるとみなす」では何だか消化不良です。もちろん、ここで大切なことは「この筆者は私に何を伝えたいのか」と、著者のメッセージを受け取ろうとする読み手側の姿勢です。この姿勢があれば、「どんな資源なの?」、「とある資源では広すぎるよ。だいいち、資源って、人間だったら、資質とかだし…」など思うはずです。そうすると、resource をもうちょっと限定してもらいたくなって、“to use...” を見たときに、ああ、これは resource を限定しているのだろう、と推測することになります。

こういうと、限定がつく名詞の前には a ではなく、the がつくのではなかったのか? ここまでにもそういう話をしていたではないか、というツッコミが入りそうですが、言葉の学習で大切なことは、原則を覚えた上で、「こういうこともある」という経験を積むことも大切です。

## 「こういうこともある」ということ

人間がやることには、ある程度の法則性がありますが、自然科学と違って、すべてが原則通りに展開されるわけではありません。either A----- or B---- という表現でも、原則 A は either の直後からが A の領域ですが、A-either--- or B----- ということもあります。こういうとき、英語の教師は「こういうこともあるのです」と言いますが、それはそれとして、「ふ〜ん、こういうこともあるのね。

一つ経験値高くなつたナ」など思うゆとりという幅は必要です。そのゆとりを持つためには、まずは原則（圧倒的多数派）やファーストチョイス感覚を身につけることが必要です。そのために我々ノンネイティブは文法から学び始めることが多いのです。原則がわかっていないと、英語は何でもかんでもすべて暗記しなければならない、と誤解します。もちろん、何でもかんでも暗記していても最終的には英語力は身につきます。何でもかんでも暗記しているうちに、「普通は…」とか「こういう原則があるな」など、「パターン」に気づくようになるからです。しかし、量をこなすことによってこの力を育むには英語に1万時間以上触れる必要があるなどと言われていきます。それが可能でない場合には、やはり英語の整理法をある程度知識として頭に入れておく必要があります。先輩の経験を取り入れる必要があります。そのために英語学習があるわけです。また、「通じる」「通じない」ではなく、大人として恥ずかしくない英文を書いたり、話したりするためにも論理的な学習が必要で、英米でも英語の授業があるのはこのためです。

ただ、今の場合は、「こういうこともあるのです」以上の説明ができます。なぜ“the” resource to use ではなく、“a” resource なのか、と言えば、“resource to use profitably” 「有益に使うべき資源」というのは、時間だけでなく、ほかにもいろいろあってその中の一つとして時間がある、という意味合いを出したいからです。ですから、限定がついた中でも、それに相当するものがいくつかあって、そのうちの一つ、という場合は、後ろから限定があっても、名詞の前に不定冠詞が置かれることはあります。これはこれで一つの経験ですね。で、そういう精読をしておく、英作文をする場合にも、a がよいのか、the がよいのか論理的に判断しながら書くことができるようになります。そういう意味でよい英文を丁寧に読むこと

# 強者の戦略

が非常に大切になります。英語教育に携わるものの大きな使命の一つが、そういう良い素材を提供することだと思っています。ちなみに同じ下線部(ウ)の中の“the benefits of...”の benefit が複数形になっていることに気づいていましたか？ことさら強調して日本語に出す必要のないところですが、英語の内容としては、benefit と benefits では違うからわざわざ s がついて複数形になっているわけです。ここでは、一人でいるということの持つ利点がいくつも、いろいろあると示しているわけです。日本語に訳すこと中心に考えたり、訳した日本語から内容を理解しようとしていたのでは気づけないところです。こういうところに気づけるようにするのが「英語脳」を作る目的の一つでもあります。

それから最後の“more profitably”も、わざわざ訳出するかどうかは別として、比較級であることに気づいていましたか？『『より』有益に』って何より？当然、文脈的にわかっているから書いているわけですが解釈上押さえておきたいポイントです。もちろん、一人でいることよりも、もっと有益に、という意味ですが、不明であれば、あるいは自信がなければ、次の英文を見ればすぐに解決します。“instead of using time alone to think (or not think)”とあり、これが一人でいることの言い換えと気づけば、なるほど、一人でいて考え事をしたりしなかったりすることよりも、もっと時間を有益に利用しなければならない、つまり PC やデジタル機器を利用して仕事をするなどに使わなければならないものである、という観念に支配されちゃってるのね、それで、最後の文で、“we hurry to fill it (=the time) with some digital connection.”となるわけね、とわかります。

さて、多くの脱線を伴いながら、かなりのスローモーションで説明しましたが、最後まで読めました。英語の構造を前から把握するという感覚が

わかってもらえたでしょうか。

## 英文の難易度の尺度

ところで、ここまでファーストチョイスという言葉は何度も言ってきましたが、大学入試問題では、ファーストチョイスではうまくいかないところを皆さんの頭を使って、セカンドオプションにたどり着けるような問題も出題され、そういう意味で、「これ、普通のパターンではないな、ではここをこう考えて…」などという構造レベルでの思考力も要求する問題があります。高度な AI がなければ実用的な翻訳機が存在できない、やはり現時点では人間のアタマが必要な英文から出題することで受験生の思考力を試すような問題です。しかし、今回のこの東大の問題はすべてファーストチョイスで読めるので、そういうこともあり、この英文の難易度は「標準」と判断できます。ただ、東大の和訳問題の東大らしさは訳語にあるとも言えます。きちんと英文の内容を理解できていなければ、わかりやすい日本語で表現できなくなってしまいます（これは高度な AI のない翻訳機の場合も同じ）場合が多いのです。辞書の意味の引き写しでは伝わらないところに下線部が引かれ、その和訳が求められることが多いのです。

もちろん、この英文は、入学試験や構造解釈の教材のために書き下ろしたのではなく、筆者が自分の伝えたいことを発信し、読者がそれを受け止めるための道具として存在しているにすぎません。ですから筆者が伝えようとしているアイデアを受け取れなければ、読んだことにはなりません。そこで答案作成上必ず必要な（先述の、「読む」という行為の根本でもある）英文の内容理解とそれを反映した訳語の関係に話を移してゆきましょう。

# 強者の戦略

## 英文の内容理解のために

1つの英文を理解するには、その英文単体だけではいろいろな解釈の余地が出てきます。たとえば、下線部(イ)の最後のほうの、“to get a coffee”のgetの意味内容です。第3文型のgetですからget Aで「Aを得る(手に入れる)」「Aを受け取る」というのは確かにそうなのですが、この英文は、筆者がボストンからニューヨークに移動中の電車の中で、コンピューターを使って作業をしていたときに(ちょっとブレイクをとるために)、“on my way to get a coffee”という文脈で出てくる表現です。そうすると、ここでは、on my wayは自分の座っている座席から飲み物を販売している車両へのwayで、get a coffeeは日本語ではコーヒーを「買う」と表現すべき感覚になります。その前の“look outside”というのも、「外を見る」ですが、「車両の窓の外を見る」ことであると具体的にイメージ化できている必要があります。

ある英文の意味はその1文だけでは決まりません。前に不定詞の副詞的用法のところでも触れましたが、I'm sorry to be late.も、通常は、感情表現のあとの不定詞の副詞的用法は原因・理由なので、「遅れてすみません(もう既に遅れてしまった場合の表現)」となりますが、不定詞の未来性に着目すれば、遅れるのが今からさきの時点を目指すともとれ、その場合には、「申し訳ないですが、遅れます(遅れそうだから事前に謝っておく表現)」という場合もあり得ます。ただ、この2つの解釈は内容が全く違うので、英文を文脈の中に戻してやればどちらの意味で使っているかは極めて明白になります。文章全体の中でそのセンテンスがどういう位置づけにあるかを考える習慣をつければ解釈に困る英文というのはほとんど存在しません。仮に位置づけがわかりにくい文章があれば、その英文は悪文で、書き直しの対象にするべきものです。文法問題の参考書や問題集

は1文で問題が与えられているものがほとんどですが、「実はセンテンスの意味というのは、その1文だけでは意味が確定できないのでは?」そう、意味を確定させるためにも、きちんと文脈のあるところへそのセンテンスを戻して、その文章の意味を考えたいなあ…」などと思って長文読解を読みたくなかった人、大正解です。これが英語の授業で長文読解を扱う意味です。

## 訳語の大切さ

さらにそうやって理解した内容を日本語で表現することを求められる和訳問題となると、英文から受け取ったイメージがきちんと伝わるように訳語を工夫しなければなりません。この場合には、getという英単語と、「得る」という日本語の守備範囲の違いから、訳語の吟味をしたり、より状況が伝わりやすいように語句を加える、という作業が必要になってくるわけです。

その人の理解度や思考の奥行きは訳語に現れる、などと言われることがあるのはこのためです。そういう意味で、内容理解と「訳語」の関係は密接に関係していて、日本の大学入試から和訳問題がなくならないのもこのためではないかと思えます。そのほか、下線部(ア)の“in early childhood”のearlyの訳語を単に「早い」として、「早い子供時代に」とはしないでしょう。きちんと単語の核となる意味、中央値を理解し、そこから文脈にふさわしい訳語に置き換えていくという単語力も必要です。earlyという単語は、ある時間の幅の中の最初のほうを指します。少しわかりにくい場合、対義語を考えるのも有効です。earlyの対義語はlateです。lateはある時間のスパンの中の後半、終わりのほうです。ですから、latestなどと最上級にすると、現在に時間的に一番近いところの、という意味で「最新の」という意味になったりもします。latest newsは「最新

# 強者の戦略

情報」ですね。順番的に最後の日曜日は last Sunday で、これを日本語では「この前の日曜日」とか「先週の日曜日」などと表現します。early はスパンの切り方により訳語が異なってきます。そのスパンが人類の歴史に関する文脈であれば、その歴史の最初のほうを指すこととなりますので「昔の」という訳語になりますし、一日というスパンであれば、「朝早くの」、人の一生であれば「若い頃の」という日本語が適切です。今は childhood の中の最初の頃を指すわけですから、「幼い」というくらいの意味で、「幼い子供時代」と表現するのが直訳です。early という単語の守備範囲の広さ、日本語の「早い」との領域の重なりと違いがわかりますね。

単語の核となる意味をしっかりと覚えることも役立つ単語力を身につける上で非常に大切なことです。この力は文章をたくさん読むことで育まれる側面もありますが、労力と時間を省く方法があります。英語技能の先輩である先生が、「この単語はね、こういう意味でね…」と語り出したら、それは先輩が苦労して獲得した経験を授けてくれていると思いませんか。英語の授業の大切な機能の一つです。

## 辞書の使い方

もう少しこの話（内容理解と訳語の関係）を続けます。さきほど「より状況が伝わりやすいように語句を加える」と述べました。下線部 (ア) の warmth の訳語を考えてみてください。単に「温かさ」とするのではなく、前後の内容を考えれば、一人であるさみしさと対比的な意味で用いられていることから、「人とともにいることで感じる温かさ」「人の温かさ」などと訳す方がより意味がはっきりします。辞書には「思いやり」「親切」「熱意」などの訳語も与えられていますが、それでは少しズレてしまいます。そういう意味で辞書

の訳語の中から最適なものを選ぶ、というだけでは不十分です。辞書というのはその単語の中央値（核となるイメージ）を与えてくれているにすぎません。辞書は内容理解の基礎を与えてくれる大変便利な道具ですが、和訳をする際には、辞書の訳語にこだわらず、その文章の状況にふさわしい日本語に変えていく（あるいはそれを加えていく）という姿勢も必要です。辞書はすべての訳語を収録しているわけではないのです。

こういう部分は、皆さんが自分の書いた和訳問題の答案と模範解答を照らし合わせることで気づかされることもあると思います。「ああ、なるほど、この訳うまいなあ…」と思わされた体験がある人はかなりの英語力のある人です。強者になると、自分の書いた答案と模範解答をけんか腰で見比べて、「先生、この解答はこう書いてありますが、私のこの訳語の方がよくないですか？」と聞いてくる高校生もいます。そして、事実、「あなたの答案の方が上ですね」という場合もあります。どちらも間違いではないけれど、奥行きに違いのある和訳があります。和訳問題の一つの到達点は、模範解答と勝負する、という境地に立てるようになることです。これが模範解答の本当の利用方法であると言っても過言ではありません。そういうことをわかっていますので、解答作成者も相当なプレッシャーを感じて作ります。実は、相当な時間をかけて作成し、先生同士で相互チェックしてから世に出されているものがほとんどです。

そして、模範解答から気づかされたことを自分のものにするためには是非ともやってほしいことは、模範解答から取り入れられるところを取り入れた上で、自分の考えるベストな和訳を「清書する」という訓練です。言葉はピアノやスポーツと似ているところがあると述べました。やはり正しいフォームでアウトプットできるように真似る、ということを通して体にしみこませる作業は必要です。このことは圧倒的に書く量が少なくなっ

# 強者の戦略

ている英作文において特に注意しておいてほしいことでもあります。

## 文脈、論理展開について

ここまで、ある英文の内容を真に理解しようと思えばその英文の前後の文脈（論説文であれば論理展開）を把握することが大切だと述べてきました。「論理展開をつかむ」というのは、あるパラグラフには必ずメインアイデアがあって、メインアイデア（主張）を表す文とそれ以外の文の関係（言い換え、例証、対比、理由、脱線など）を把握することです。それぞれのセンテンスの役割を確認する、そして今度はその集合体の1つのパラグラフが他の段落とどういう関係にあるかまで広げて見てゆくことが論理展開を把握することです。

では、この問題文の第3パラグラフ（One philosopher has...から始まるパラグラフ）の展開はどうなっているのでしょうか。

第1文ではある哲学者の言葉を引きながら、loneliness(= the pain of being alone) と solitude (= the glory of being alone) の定義をしています。そして下線部（ア）となる第2文では、loneliness のさらなる説明を筆者の言葉で説明し、第3文では solitude のほうの説明をしています。そして、第4文を but ではじめ（つまり、一般論を言った後に筆者の主張を出すという展開）、solitude を経験したことがなければ、loneliness と solitude の区別ができなくなってしまう、と述べられています。第5文以下もそれと同じ方向で書かれています（経験が不足しているために solitude を知らず、loneliness しか知らない状態になっている）。

続く第4パラグラフ第1文と第2文である下線部（イ）、第3文で筆者の体験談を例に引きな

がら、現代ではいかに solitude を経験することが難しくなっているか、自分たちの時間を奪われてしまっているかを述べています。そしてその理由が第4文の下線部（ウ）に記されています。そして最終文で、solitude の経験とは using time alone to think (or not think) することであり、その機会を奪っているのは、この段落の冒頭で出たコンピューターをはじめとする digital な機器との connection であると結んでいます。文脈、文脈などとよく言われますが、結局文脈とは、言い換えと対比に気づいてそれを軸に文章を読むことです。対比とて、逆から同じことを述べたものに過ぎないので、結局のところ、文章とは言い換えの連続であると言えます。このような配慮ができれば、この文章が伝える、loneliness や solitude がどういうものであるか、しっかり把握することができます。

このようなことを念頭に置くと、loneliness と solitude の訳語について、辞書はどちらにも「さみしさ」「孤独」などと全く同じ訳語が与えられているのですが、この英文の答案としては、これらの引き写しでは機能しないこととなります。なぜならここではこの2つは別のもので定義されているからです。

英英辞典を利用すれば、“loneliness”は、

“Loneliness is the unhappiness that is felt by someone because they do not have any friends or do not have anyone to talk to.”、

一方で、“solitude”は、

“Solitude is the state of being alone, especially when this is peaceful and

# 強者の戦略

pleasant.”

などと書かれており（コウビルド英英辞典より引用）、やはり単語本来の意味でも違うとわかります。ただ、この問題はこういう知識を前提に出題されているわけではなく、この英文全体をきちんと読むことで *loneliness* がどういうもので、*solitude* がどういうものかを理解することを求めています。現在の大学入試では、英英辞典を引かなければわからないような問題は出題されません（もちろん、英英辞典を引くことにより理解が深まることは間違いありませんが）。

さて、*loneliness* と *solitude* は内容が違うのですから、下線部（ア）の *loneliness* と下線部（ウ）の *solitude* の和訳問題、ということになると、日本語でも別の訳語で表現しなければなりません。下線部以外の言い換え部分を参考に、それぞれの訳語を考える必要があります、ここにも思考が求められます。そこでここでは、*loneliness* は「一人でいて辛くなること」→「孤独を感じること」、*solitude* はそれとは逆の意味で「一人になれて恩恵を感じること」なので対比的に「楽しく一人でいること」、「一人でいることを楽しむこと」と表現することにします。

## 5つめの技能

さて内容も理解できたところですので、答案作成の最後の仕上げとして、「和訳」に着手しましょう。

すでに述べましたが、英語は前から読むものですが、前から訳すものとは限りません。前から読む、というのは、前置詞や接続詞、関係詞、準動詞などの前では一旦止まって（息継ぎをして）、そこまでの意味を考え、次を予測する、ということ（単語を前から読むというのではなく、息継ぎ

までを一気に読んで、そこまでの意味を考えると）です。しかし、これは和訳とは連動しません。**There is nothing that is more important than time.** という英文を読む際に、もちろん、関係代名詞 **that** の手前で一旦止まって息継ぎをし、ここまでの、「何もない」と意味をとり、頭の中で、『何にもない』って、そんなわけないじゃない、あり得ない。あり得ない英文の後は、限定が来たり、逆転が来たりするものだ（**There is no mother // that doesn't love her children.** や **I cannot see this picture // without thinking of her.** など）から、**There is nothing that...** の場合も、この **that** は関係代名詞の **that** に違いない…つまり、内容的には、「関係代名詞で限定されて『~のようなものは何もない』となるはず」と思っただけで最後まで読んで、やっぱり！となる。こうやって英語は前から読みます。ただし、これを前から訳して、「何もない。そしてそれは時間より重要です」などとやったら壊滅的な日本語になります。こういう場合、「時間よりも重要なものはない」と『訳し上げる』必要があって、後ろから訳し上げるということは必ずあります。言語構造が違う（英語の形容詞は後ろから修飾するが日本語は前から、など）以上、訳の際には右から左への訳読は普通に起こります。大切なことは、この作業を、英語を読む作業と切り離して考えることです。まず英語を、英語の頭で読み、意味内容をきちんと把握する。そして今度はその内容を日本語で表現するとどうなるか、と考えて翻訳という作業に入るといふ2つの作業があるという意識です。

英語力を鍛えるためには4技能をバランス良く、とよく言われます。その重要性は既に述べました。ただ、大学入試の和訳問題に対応するためには、5つめの技能が必要となります。それが「翻訳」という技能です。ですから、和訳をするという際には翻訳という技能を身につけ、翻訳上の注意点を意識しながら日本で表現してゆかなければ

# 強者の戦略

ばなりません。逆に、英文を読むという作業をしている時はあくまでも英語脳を使って読まなければ前から読めませんので、そのときに日本語を入れて考えることはしないようにしなければならぬことは既に述べました。

## 和訳作成上の注意点

それでは、ここまでの考察で、英文と内容の理解はできていますので、東大の「和訳せよ」という問いに答える最終段階である翻訳という作業に移りましょう。

下線部 (ア) から始めます。まず、出だしの “loneliness is...” のところは先述の通り、loneliness というものの説明をしているという点、solitude と区別する必要がある点 (solitude はプラスの意味で一人であることですが、loneliness は一人であるさみしさを表していると言脈 (言い換えと対比)) に注意が必要です。loneliness は、日本語の「孤独」に近い感覚ですので「孤独」と訳し、solitude のほうを「一人であること」と訳すことにします。そこで、出だしは、「孤独というのは、感情的に、そしてさらに (even) 肉体的にもつらいもので、」となり、後半の分詞構文は、そのまま訳し下しても差し支えがないので「そして…」と訳し下します。もちろん主語との適合もチェックします。問題は、“early childhood, when we need it most” の訳のタイミングです。関係副詞 when の前にカンマがあるのでつい訳し下したくなる (幼いこども時代、そしてその子供時代に私たちはそれを最も必要としている…) のですが、そうすると支離滅裂な日本語になります。読み手に伝わりません。ここは訳し上げて「私たちがそれを必要としている子供時代」とするほうがはるかにわかりやすくなります。

## 文法原理を根本から理解する大切さ

ではなぜカンマがあるのかといえ、これは関係詞の根本的な理解が絡んできます。たとえば、「日本に住んでいるトムがこのほどアメリカに帰国することになって…」という日本語を英語で、Tom who lives in Japan… とすることはできません。

関係詞について、限定用法と継続用法という2つの用法があるということを知ることがあるでしょうか。一般的に、関係詞の前にカンマがない関係詞の使い方を限定用法、カンマのついている関係詞の使い方を継続用法と呼びますが、具体的に何が違うのか、簡単に説明してみましょう。

限定用法というのは、言い換えれば「他と区別する用法」です。

the boys who are happy はカンマなしで使えます。なぜなら、少年という大きなジャンルに「幸せな」少年というように、少年は少年でも幸せな少年、と限定をつける、言い換えると、この裏には不幸な少年がいるという前提があるからです。つまり、ある少年を他の少年と区別する用法となっています。

ところが、「日本に住んでいるトム」というときの、トムは固有名詞で、ある特定の個人です。このトムというこの世に一人しかいない人に限定をかけることは不可能です。ですから日本語の表現がどうであれ、英語として、Tom, who lives in Japan とカンマを打って、限定しない用法、表記にしなければならないのです。そうすると、以下の2文の違いもわかりますね。

The travellers, who knew about the floods, took another road. (This sentence implies that all the travellers knew about the floods and took the other road.)

The travellers who knew about the floods took another road. (This sentence implies

# 強者の戦略

that there were other travellers who did not know about the flood.)

カンマの有無で英語が表している内容が異なってきますが、これを日本語でどの順序で和訳するかはまた別問題です。カンマがあっても訳し上げなければならない場合や、逆にカンマがなくても訳し下さなければならない場合もあります。

今の東大の英文に戻って考えると、筆者に言わせれば（客観的な裏を取る必要などなく、あくまでも書き手が）、子供時代というのはあまねく、我々が人間的な温かさを必要とする時期で、人間的な温かさが不要でない子供時代などない、と考えているからこのようにカンマを打ったと考えることができます。言い換え、同格的な役割をしていると考えることもできます。このことがわかった上で、日本語でどう表現するかを考えます。日本語にはこういう区別はないので、「我々が温かさを最も必要としている子供時代に」とするほうが自然であると判断して、関係詞の前にカンマがあっても、訳し上げます。

## 訳し上げる際の注意点

ところで、「訳し上げる」という際に必ず考慮する必要があるものが代名詞です。

「私たちがそれを最も必要としている子供時代に人間的な温かさを欠いてしまっていることから生まれてくる…」とやると、日本語の「それ」が前方照応の言葉であるにもかかわらず、前に指すものが存在せず、後ろにあることになってしまい、日本語の矛盾が生じてしまいます。そこで、この場合、問題文の指示があろうがなかろうが、itに warmth を代入して訳出しなければなりません。この問題の設問は、「it が何を意味するか明らかにする」ように指示してあって、それに従えば自然とこの点はクリアできるわけですが、こ

うミスを防ぐことにもつながる、という点においては、ある意味親切な問題だと言えます。

以上のことをまとめると、

「孤独を感じることは、感情的にそしてさらに肉体的につらいもので、人の温かさを最も必要としている幼い子供時代にそれを欠いてしまっていることから生まれてくる」

というのがここでの和訳案となります。

それでは、(イ)に進みます。“I wouldn't have known this,” ここまでで、「私はこのことを知らなかっただろう」という仮定法過去完了になります。で、問題文の指示通り、this に前出の “we passed through a magnificent snowy landscape.”

「私たちがすばらしい雪景色の中を通り過ぎて（電車内からの視点であれば、『通過中である』でもよいですね）」の部分代入しておくこととなります。そして、but for 以下は「～がなかったら」「～という事実がなければ」となりますが、but for the fact that S+V 「SV するという事実がなければ」というのは、結局、if S not V と同じ、つまり下線部 (イ) の場合であれば、if I had not happened to look outside on my way to get a coffee. (仮定法過去完了) と同じになりますので、「事実」などという訳出はせずに、「もしコーヒーを買いに行く途中で偶然に（窓の）外を見なかったら」のほうがより自然な日本語になります。この「自然さ」の尺度は難しいですが、普段自分が読んだり聞いたりする日本語になっているか、冗長でないか、日本語としてわかりやすいか、ということ日本語ネイティブの視点から検証すればよいのですが、英語で読んでいる時点で、「シンプルな英語で表現すると？」という問いかけは有効です。文法問題で書き換え公式など学習

# 強者の戦略

したりします（「次の2つの文の意味が同じになるように空所に適語を補充せよ」というタイプの問題）が、その視点が役に立つこともあります。最後に訳の順序ですが、英語は、1文の中に複数の情報がある場合、その情報の格差をつけるという目的からも、主たる情報が先で付随情報が後という書き方をすることがあります（この場合も主節が先、条件節があと）が、この順序は必ずしも日本語と一致するわけではありません。日本語は情報の格差や、時系列、因果関係などあまり意識しない、つまり書き順や一つ一つの要素の長さにはあまり気を配る必要がありませんので、こういうところは英語の語順にこだわるのではなく、日本語の自然さを優先させます。そうすると、ここでは条件節から訳し上げるほうが自然な日本語になります（仮定法の翻訳のところで体験済みですね）。つまり、“but for”以下から和訳するのがおすすです（あくまで翻訳の問題として）。

以上のことをまとめると、

「もしコーヒーを買いに行く途中で偶然に窓の外を見なかったら、自分たちが見事な雪景色の中を通過中であることを知ることはなかっただろう」

となります。

それでは最後の(ウ)にいきましょう。“We deny ourselves the benefits of solitude...”の部分は、ここまで本稿で述べてきたことをまとめて、「私たちは、一人であることを楽しむことが持つ利点（一人を楽しむことから生まれてくる恩恵）を自分自身に与えない」となります。

そして because 以下については、修飾関係に注意しながら、「なぜならば我々は一人であるために必要な時間というのが（ひとりであることより

も）もっと有益に利用するための資源であるとみなしているからだ」となります。

そして、全体の構成を考えて、

「私たちが、一人でいることを楽しむことから生まれてくる恩恵を自らに与えないのは、そのために必要な時間をそんなことよりももっと有益に利用するための資源であるとみなしてしまうからである」

となります。

こう考えると一見簡単そうな英文でも、きちんと読み取って自然な日本語で表現するとなるとさまざまな力が必要になることがわかんと思います。

これは東大英語の特徴です。一見すると簡単なのですが、それを制限時間内でミスなく書くのは大変です。そこで求められるのはホンモノの英語力です。

ホンモノの英語力を身につけるためには、やはりまず基礎力（単語力、文法力、構文力）をきちんとつけること、そしてその知識を正しく（英語脳で、最初はスローモーションでも構わないので、前から返り読みせずに、左から右に）運用できるように練習することが大切です。そしてそれを過去問などを使って実践演習する、つまりきちんと答案を「書く」ことも大切です。頭ではなんとなく意味がとれてわかったつもりになっても、いざきちんと伝わる日本語を書こうとすると難しいことがあるものです。最後まできちんと手を動かして練習する。

そして、授業などでは英語の先生が前から読むための方法を教えてくれるのですから、それをしっかりメモして、復習しましょう。最初はスピードに拘らず、正しいフォームで前から正しく読む。そして少しずつスピードを上げてナチュラルス

# 強者の戦略

ピードまで持って行く。その過程と仕上げに音読は大変有効です。スピード的には、大学入試のリスニング問題の英文を読むスピードくらいで黙読はできる場所まで持って行く必要があります。何度も何度も同じ英文を復習する意味、反復練習しましょう、と言われるのはここまで持って行くためです。ある映画の台詞を全部覚えたら英語が話せるようになった！という話は一面の真理を含んでいます。

習得した英文が増えてくると、人間の言うことも、表現形態も無限にあるものではないので、初めて読む英文でも以前読んだ英文と同じようなパターンに出くわして、それはサッと処理することができるようになって、だんだん慣れが出てきます。実際、今年のこの問題も文法構文はもちろんですが、文章の運びなどもよく似た英文が過去に出題されていました。

また、京都大学の入試問題の英語は日本一難しいと言われ、構造面でも複雑であると言われますが、正しく前から読みさえすれば構造面では全く困難はないです。内容についても言い換え対比に気をつければ理解することができます。今年度の京都大学の入試問題[I]にトライしてみてください。そして、和訳問題について、前から読むとどうなるか、スローモーションでよいので考えてみてください。主語の次は動詞、しかし、主語にたくさんの修飾語がついている、でもどこかで修飾は終わって、動詞が来るはず、切れ目はどこだ？息継ぎはどこでしょう？など考えながら前から読む。そして動詞を見たら動詞の使い方を考える。他動詞なら目的語が要る。直後にない場合は、目的語の前に挿入が入っていると考え…など、それほど難しいものではないと思えてくるはずです。機会があればまた説明しますが、今回はこれくらいで一旦筆を置きます。

今村 朗（研伸館英語科講師）